詩編 97 編の黙想（２０２３年９月１３日東福岡教会祈祷会奨励松見俊）

喜び祝え、義しい裁きが王座の基をなす

この詩編も王としての主なる神を賛美する詩編である。日本社会は「日本国憲法」第 14 条で法の下での人民の平等を認め、２項で「華族その他の貴族の制度は、これを認めない。」としながら何と第１章第１条で「天皇」制を認めている。これは矛盾である。天皇は人民ではない王、文字通りは「祭司王」なのであろうか。この「クニ」（国体）の曖昧さの根源はここにあり、「議員内閣制」であるにもかかわらず（岸田第二次改造内閣）、この数代、首相があたかも「大統領」のように行為する可笑しさもこの曖昧さから由来しているのであろう。詩編はシオン（エルサレム）伝承と王政を認めているが、（一部預言者たちは王政に反対であるが）本来 Yahweh が王であり、その基は「正しい裁き」であると語る。また、神顕現と義の審判（倫理性）の根拠としてシナイ契約が両者を結びつけられている。私たちのクニで「正しい裁き」は確立しているのか、何が政治・社会支配の正当性を担保しているのだろうか？信仰者は Yahweh 神のこの義しい裁きのゆえに喜び、感謝するのである。この詩もエルサレムでの王の即位式・「契約祭」に歌われたのであろうか。

１．主こそ王（1 節）

ここでも 96 編同様に「王」という用語はなく、Yahweh mālāk で「主は支配する」である。reigns である。「支配」については讃美歌 291 参照。Yahweh が支配されるということが、喜びをもって賛美される。それは全地に向かって、そして、ここでは「多くの島々」に向かって呼びかけられている。「島々」（’îyîm, 口語訳は「海に沿った多くの国々」と翻訳　エーゲ海の島々を直接指しているのであるが、イザヤ書 42:10 以下に登場する述語）と「地」によって目に見える全世界が意味されている。「イ」とは「住まい可能な、あるいは住民のいる島」の意味である。ここから海岸地方やいわゆる島という意味となった。Yahweh の即位は全地（島々と大地）で喜ばれる。

２．主なる神の威光と正しい裁き（2－6 節）

なぜ、主なる神の即位は喜ばれるのか？それは主なる神の神顕現・現臨の威光（蜜雲と濃霧が立ちこめている。原文は「雲雲と闇」。日本でも「出雲」の神々？さらに、神顕現の威光は、闇の中で輝く火、稲妻・雷鳴等）と「正しい裁き」（sedeq ūmišpat）の故である。「主の正しさ」（sidqōw）は 6 節にも登場しており、諸々の天が、神の「義」を「宣言している」と歌い、あらゆる人民が彼の「栄光」を見ているという。

創造神の威光と歴史世界における義しい裁判こそクニの基である。隷属の地エジプトを脱出するヘブライ人を導いたのが雲の柱と火であった。稲妻は一瞬闇を照らすが荒野や平地に住む人々には「見悶え」する脅威であり、無力な人は蠟が溶けるように（熱エネルギーに満ちている主、熱情の神）感じざるを得ない。稲妻・雷鳴はルターをして、修道院に入る決意をさせるほどの「脅威」である。

3．偶像の空しさと全地に君臨するいと高き神イスラエルの主との対比（7－9 節）

「すべて、偶像に仕える者/空しい神々を誇りとする者は恥を受ける。神々はすべて、主に向かってひれ伏す。（困惑させられるのは、（直訳　yêbōšū kāl ‘ōbədê pesel 刻んだイメージに仕えるあらゆる者たち hammithallîm bā’ĕlîlîm 彼ら自身の偶像を誇る者たちであり）、偶像が主に向かって（「彼に向かって」）ひれ伏して礼拝したと言われ、これは過去の記憶の出来事として語られている。

「シオンは聞いて喜び祝い/ユダのおとめらは喜び躍る/主よ、あなたの裁きのゆえに。」（これを聞いてシオンは楽しみ、ユダヤの娘たちは喜ぶ)。あなたの裁きの結末に対して。ここでは義による審判とはいわれず、ただ「ミシュパート」（複数形）だけであるが、当然主なる神の義の裁きである。信仰者はこの実現を讃美しつつ待望し、待望しつつ賛美する。「主よ」との呼びかけが節の最後に来る。

「あなたは主、全地に君臨されるいと高き神。神々のすべてを超え、あがめられる神」「アール　カール」の繰り返しも賛美の技巧であろう。９６編４節にも同じような表現が登場した。基本的神賛美であり、信仰告白である。「いと高き神」（‘elyōwn）は王国以前の古い神名である。

４．主を愛する人と主なる神の助け(10－12 節)

以上の賛美、信仰告白を受けて詩の結論部分が来る。信仰の応答として「主を愛する人は悪を憎む。」祭儀中心の日本の神道とは違い、信仰と倫理性がここでは堅く結びついている。「彼は彼の聖徒たちの魂を守り、彼は邪悪な者の手から救ってくださる。そして、倫理性はさらに、救済と結び付けられている。

「神に従う人のために光を/心のまっすぐな人のためには喜びを/種蒔いてくださる。」光が義なるもののために蒔かれ、そして心において真っすぐな人のために喜び・楽しみが蒔かれる。やはりここ c でも「神に従う人」よりヘブライ語に忠実に「義なる人」（ツェデク）の方が良い。「義」はいのちとシャローム、救いを生み出す包括的なものである。光と楽しみを種蒔いてくださるというのも良い。今というより将来必ず稔りがあるように光と楽しみを種蒔いてくださるというのである。

詩の結語は勧めである。「神に従う人よ、主にあって喜び祝え。聖なる御名に感謝をささげよ。」（やはり、ここでも「義なる人よ」である。「喜び」は単なる情緒ではなく、Yahweh にあって喜び祝えであり、単に感謝せよではなく、彼の聖を記憶して感謝せよ、である。喜びと感謝の根拠、由来が明示されている。

この詩は１節の「喜び躍れ。喜び祝え」で始まり、８節でも「喜び祝え」「喜び躍る」が繰り返され、最後に「喜び祝え」で締めくくられている。主なる神の威光と正義による審判と信じる人への助けのゆえに、喜ぶことが可能となっている。